

第一 問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

精神分析とオープンダイアログの違いは、まず何よりもそれぞれの臨床が行われる空間配置にある。

よく知られているように、精神分析の創始者フロイトは、ごく初期には対面法(治療者と患者が相對するような形で面接を行う方法)を用いていたが、のちに患者を寝椅子(カウチ)に横たわらせ、治療者はその傍らに座る、という特異な空間的配置(背面椅子式自由連想法)を用いるようになった。

このことは、精神分析が、^{なまじ}汝と我(お前と俺)という、それなりに対等な——空間的に表現すれば「水平的」な——関係ではなく、〈他者〉(l'autre)と主体という権威とそれに対する服従ないし反抗が生じやすい「垂直的」な関係を、治療のための原動力として用いていることを意味する。

想像してみればすぐに理解できるように、分析家のオフィスで寝椅子に横になることは、「横」になってリラックスできるというよりも、むしろ本来ならば「横」にいるはずの分析家という他者を自分の「頭上」にいるようにすることにほかならない。言い換えれば、精神分析における空間は、寝椅子に横たわることによって、人間どうしのごくふつうの水平的関係を人工的な垂直的關係へと作りかえているのである。

このことは当然、精神分析の過程で生じることにとも関わってくる。

たとえば、転移(Übertragung)のことを考えてみるとよいだろう。転移とは、患者が幼少期において体験していた重要な他者(両親などの養育者の場合が多い)との関係が、現時における患者と分析家とのあいだで再現されることを指す。

ひとは、幼少期において作り上げられた(特に性愛面における)対人関係のパターンをのちの人生のなかでも繰り返すことがしば

しばあるが、とりわけ精神分析においては、そのような転移（場所を転じてなされる再現）が頻繁に生じるのである。

それは、分析における空間配置が、幼少期の子どもと養育者のそれとよく似ていることとも関係している。当然のことながら、いまだ直立二足歩行を身に付けていない子どもは、横たわった状態で、自分の「上」に他者がいるという空間配置のなかで人生を始めるのである。

実際、精神分析家ロバート・ウエルダー（一九〇〇～一九六七年）は、寝椅子を用いた精神分析が、助けを求めることとそれを庇護すること、内密な部分を包み隠さずに暴露すること、不安とそれを解消して安心をもたらしこと等を可能にしているという点で、「大人に対する子ども」の立場を患者にとらせていることを指摘している。

なるほど、同じく「横になる」という空間配置のなかで行われる入院や人工透析において、ときに患者に退行がみられることはよく知られているが、これもまた、本来なら水平的なものであるはずの他者との関係が、突如として垂直的な「大人に対する子ども」の関係へとヘンボウ^aするために生じているのだろう。自分が寝ている状態で、他者が自分の足元のほうから語りかけてくるという状況は、幼児期において養育者から世話をされている状況の再現にほかならないのである。

ここで確認しておかなければならないのは、精神分析において「横になる」ことが、単に「大人に対する子ども」の関係を人工的に作り出すだけでなく、「超越者」と、それに対する自分」という関係をも作り出すという点である。

というのは、さきほど例にあげた入院や人工透析において、他者が自分の足元^{か、}から語りかけてくるのは異なり、精神分析においては、分析家という他者が頭上^{か、}から語りかけてくるからである。

このことは、精神分析治療の原理とも関係している。

精神分析家ジェームズ・ストレイチー（一八八七～一九六七年）に従うならば、精神分析の治療原理は、患者が、分析家を厳しい超自我（これは患者の幼少期における養育者の権威的な像に由来するとされる）として体験することに始まり、超自我と同一視された分析家が患者に対して解釈を行うことによって、患者が徐々に過去に形作られた超自我のイメージをより抑圧的でないものへと更新することによって終わると考えられている。

精神分析において、寝椅子に横たわった患者の自我は、本来であれば水平的な他者（≡隣人¹）であるはずの分析家を、垂直方向における「上」に存在する他者（≡超自我）として同定することによってはじめて、自らが根底的に変化する可能性を得るのである。

ひるがえって、オープンダイアログにおける臨床空間について考えてみよう。

フィンランドで実践されているオープンダイアログにおいては、患者が家族のどちらかから病院のオフィスに電話相談が入ると、すぐさま治療チームが組織され、相談から二四時間以内に初回ミーティングが開かれる（日本ではこのような対応は現状難しいと考えられるが、今後体制が徐々に整備されていくものと思われる）。

このミーティングには、患者本人とその家族、^bシンセキ、医師、看護師、心理士など、本人にかかわる重要な人物であれば誰でも参加できる。これらの人々がともに集まって、車座になって座り、そこで開かれた対話（オープンダイアログ）がなされる。そして、薬物療法や入院の必要性など治療に関するあらゆる決定は、本人を含む全員が出席したミーティングで決定される。

ミーティングでは、すべての参加者に平等に発言の機会と権利が与えられ、医師などの専門家の発言に患者や家族が従わなければならないという一切ない。また、患者は^cゲンカクや妄想などの病的体験について話すことになるが、その病的体験は他の参加者によって頭ごなしに否定されることはなく、むしろそこに他の参加者が新たな語りを付け加えていくことになる。

こうして、ミーティングの語りは、患者の独語的モノフォニーではなく、^ウ多数の声が響きあうポリフォニーになる。このようなミーティングを、病気が改善するまで、毎日繰り返すのである。

ポイントは、精神分析において治療者と患者というふたり（だけ）の関係が垂直方向において展開されるのは異なり、オープンダイアログにおいては、他者との関係は水平方向において展開されており、しかもふたりではなく多数の関係へと拡張されていることにある。

ただし、それはオープンダイアログが水平的な他者関係のなかだけでなされる治療法であるということの意味しない。

たしかに、オープンダイアログの出発点には「クライアントのことにについて、スタッフだけで話すのをやめる」という決定的な取り決めがあったという事実からもわかるように、この治療法が垂直的な（権力的な支配―被支配の）関係を排除し、水平的な（平

等な関係によって治療を進めようとするところから始まったことは間違いない。

しかし、オープンダイアログにおいては、家族療法家のトム・アンデルセン（一九三六～二〇〇七年）らが開発した「リフレクティング（reflecting）」という技法によって、垂直的な関係がいわば「弱毒化」された形で再導入されていることがきわめて重要なのである。

より詳しく説明しよう。

オープンダイアログにおいては、まず「本人のことは本人のいないところで決めない」ことが大原則であるとされる。この原則は、治療者のうちの誰か（たとえば、医師等）が治療方針の決定にあたって患者に対する垂直的な権力を発動させないのみならず、スタッフのあいだでも患者不在の場で垂直的な権力を用いず、すべてを患者自身が参加する水平的な対話のなかで決定することを要請する。しかし、オープンダイアログの臨床空間においては、そのような水平的な空間配置のなかに、リフレクティングという若干の垂直的な関係を可能にする契機が入り込んでくるのである。

リフレクティングとは、オープンダイアログの最中に明示的に行われる専門家どうしの対話のことであり、この対話において専門家は患者のほうを眼差す^{まなざ}のではなく、専門家どうしのあいだだけで顔を見合わせる。それは、患者の側に応答のプレッシャーを与えることを避けるためであり、さらには、そのリフレクティングを患者に観察させることによって、そのあいだに患者に自分の心のなかの声と垂直的に対話することを可能にするためである。

オープンダイアログの開発者であるセイツクラが述べているように、オープンダイアログにおける対話には、すべての参加者のあいだで行われる「水平のダイアログ」と、それによって触発された個人の内部での「垂直のダイアログ」のふたつがあり、^エこのふたつの対話の協同こそが重要なのである。

たとえば、患者がオープンダイアログのなかで父親のことを話題にしたとすれば、それを聞いている他のメンバーの心の内部にも父親をめぐる連想が生じる。そのような水平のポリフォニーを通じて、個人の内部でも父親をめぐる生じる垂直方向の「内なる声」との対話がポリフォニックな仕方可能になる。

このような技法は、これまでの「内なる声」の哲学・思想的なモデルを更新するだろう。「内なる声」が超越的な権威として作用しないようにするための「抑え」として水平方向のダイアローグを用いること。そうすることによって個人における変容を引き起こすこと。それこそがオープンダイアローグの空間で生じる治療の原理なのである。

(松本卓也『斜め論 空間の病理学』による)

〔注〕 ○フロイト——Sigmund Freud(一八五六～一九三九)。オーストリアの精神医学者。

設問

(一) 「人間どうしのごくふつうの水平的関係を人工的な垂直的關係へと作りかえている」(傍線部ア)とはどういうことか、説明せよ。

(二) 「分析家を、垂直方向における『上』に存在する他者(≡超自我)として同定することによってはじめて、自らが根底的に変化する可能性を得る」(傍線部イ)とあるが、それはなぜか、説明せよ。

(三) 「多数の声が響きあうポリフォニーになる」(傍線部ウ)とはどういうことか、説明せよ。

(四) 「このふたつの対話の協同こそが重要なのである」(傍線部エ)とはどういうことか、本文全体の趣旨を踏まえて一〇〇字以上二〇〇字以内で説明せよ(句読点も一字と数える)。

(五) 傍線部 a・b・c のカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

a ヘンボウ b シンセキ c ゲンカク

第二 問

次の文章は『狭衣物語』の一節である。狭衣大将(大将)と飛鳥井の女君は恋人同士だったが、その関係は秘されていた。以下は、飛鳥井の女君の一周忌の法要の場面である。これを読んで、後の設問に答えよ。

年の果てに、かの人の事せさせ給ひけり。心ざしのしるしには、何事をはと思せば、経、仏の御飾りを、なべてならずせさせ給ふ。何事も、まことに日の中に仏にも成るばかりに、思し掟てたり。その日、いたう忍びて、自らおはしぬ。講師は、山の座主なりけり。請僧六十人、七僧なども、並び居たり。

いみじう尊きにつけても、「めでたかりける人かな。この御心にかくまで思されけるよ」と、見る人多かり。さしもすぐれ給へる御さまに、泣く泣く読み給へる願文の悲しさは、袖濡らさぬ人もありがたげなるを、まいて大将の御直衣の袖は絞るばかりにもなりぬべし。さるは、「人目も心弱くや」と思し忍ばぬにはあらねど、ただうち聞く集、物語、古歌なども、我が思ふ筋なるは、こよなう目留まりて、あはれにおぼゆるわざなればなるべし。見たてまつる人なども、「誰ならん、いとかばかり思されたりけるは。げに口惜しかりける命のほどかな」と、見おどろかぬはなし。さまざま尊き事どもは多かれど、えまねばぬは、なかなかかひなし。

事果てて、僧も人々もまかでぬれど、自らは留まり給ひて、尼君に会ひ給ひて、尽きせぬあはれと思したり。入相の鐘の音ほかに聞こえたる、夕べの空のけしき、所がら、言ひ知らず心細げなるを、簾かき上げて、つくづくと眺め給ひて、行ひ給へるけしき、いみじう尊くあはれげなり。

暁にもなりぬらんとおぼゆるまで居明かし給ひて、あまり苦しければ、やがて端にうち休みて、まどろみ給へるに、ただありしさまにて、かたはらに居て、かく言ふ。

暗きより暗きに感ふ死出の山とふにぞかかる光をも見る

と言ふさまの、らうたげさもめづらしうて、「物言はん」と思すに、ふと目覚めて見上げ給へれば、澄み上りて、月のみぞ顔に映りたりける。雲の果てまで、さやかに澄みわたりたる空のけしきを、ただの寝覚めにだに、心細かりぬべき空のけしきなれば、かたはらにまだある心地して、見わたさるれど、人は皆遠く退きつといとよく寝たり。

一人つくづくと空を眺め給ひて、泣く泣く越ゆらん死出の山路まで思しやらるるに、ただ、かの吉野の山をも後らかさんことを、恨めしげに思ひたりしけしきなど、なつかしかりしも、ただ今向かひたるやうに思ひ出でられ給ひて、

後れじと契りしものを死出の山三瀬川にや待ちわたるらん
と思しやるも、枕浮き給ひぬべき心地し給ひて、経を読み給ふ。

〔注〕

○講師——法要において経典などを講説する僧。

○山の座主——比叡山延暦寺を統括する僧。

○請僧——法要に招かれた僧。

○七僧——法要で役をつとめる七人の僧。

○願文——願い事や志などを記して、仏事の際に読み上げる文章。

○尼君——飛鳥井の女君の伯母。

○入相の鐘——日没時につく寺の鐘。

○かの吉野の山をも後らかさんこと——飛鳥井の女君にはじめて出会った折、吉野山にちなむ和歌を用いて声をかけた狭衣大将が、恥ずかしさで答えられない女君の気持ちを確かめるために、あえてつれなくしたこと。

○三瀬川——三途の川。

設問

- (一) 傍線部ア・イ・エを現代語訳せよ。
- (二) 「げに口惜しかりける命のほどこな」(傍線部ウ)とはどのような心情か、説明せよ。
- (三) 「ただありしさまにて、かたはらに居て」(傍線部オ)とはどういうことか、状況がわかるように説明せよ。
- (四) 「とふにぞかかる光をも見る」(傍線部カ)とはどういうことか、説明せよ。
- (五) 「経を読み給ふ」(傍線部キ)とあるが、それはなぜか、直前の和歌の内容をふまえて説明せよ。

第三問

次の詩は、白居易が蘇州の知事であった時期に作られた五言古詩「双石」である。これを読んで、後の設問に答えよ。ただし、設問の都合で送り仮名を省いたところがある。

老	孔 <small>あな</small>	担	万	結 <small>ヒ</small>	俗	蒼 <small>さう</small>
蛟 <small>かう</small>	黒 <small>ク</small>	鼻 <small>よシテ</small>	古 <small>ヨリ</small>	従 <small>より</small>	用 <small>ニ</small>	然 <small>ぜんタリ</small>
蟠 <small>わだかまりテなり</small>	煙	来 <small>きたシ</small>	遺 <small>ニ</small>	胚 <small>はい</small>	無 <small>ク</small>	両
作 <small>レ</small>	痕	郡	水	渾 <small>こん</small>	所 <small>レ</small>	片
足 <small>ト</small>	深 <small>ク</small>	内 <small>ニ</small>	浜	始 <small>メ</small>	堪 <small>フル</small>	石
古	罅 <small>ひび</small>	洗	一	得 <small>レ</small>	時	厥 <small>そ</small>
劍	青 <small>ク</small>	刷 <small>シテ</small>	朝 <small>ニシテ</small>	自 <small>より</small>	人	状
挿 <small>さしはさミテ</small>	苔	去 <small>ル</small>	入 <small>ル</small>	洞	嫌 <small>ヒテ</small>	怪
為 <small>ル</small>	色	泥	吾 <small>ガ</small>	庭	不 <small>レ</small>	且 <small>ツ</small>
首 <small>ト</small>	厚 <small>シ</small>	垢 <small>こうラ</small>	手 <small>ニ</small>	口 <small>ほとり</small>	取 <small>ラ</small>	醜

石	廻 <small>めぐ</small> レ <small>ラシテ</small>	漸 <small>ク</small>	人	窪 <small>わ</small>	五	峭 <small>せう</small>	一 <small>ハ</small>	忽 <small>チ</small>
雖 <small>モ</small> レ	頭 <small>ヲ</small>	恐 <small>ル</small>	皆	樽 <small>そん</small>	絃	絶	可 <small>ク</small> レ	疑 <small>フ</small>
不 <small>ト</small> レ	問 <small>フ</small> ニ	少	有 <small>リ</small> レ	酌 <small>メドモ</small>	倚 <small>よせ</small> ニ	高 <small>サ</small>	支 <small>フ</small> ニ	天
能 <small>ハ</small> レ	双	年 <small>ノ</small>	所 <small>レ</small>	未 <small>ダ</small> レ	其 <small>ノ</small>	数	吾 <small>ガ</small>	上 <small>ヨリ</small>
言 <small>フ</small>	石 <small>ニ</small>	場	好 <small>ム</small>	空 <small>シカラ</small>	左 <small>ニ</small>	尺	琴 <small>ヲ</small> 一	落 <small>ツルカト</small>
許 <small>シテ</small> レ	能 <small>ク</small> レ	不 <small>レ</small>	物	玉	一	坳 <small>あう</small>	一 <small>ハ</small>	不 <small>レ</small>
我 <small>ヲ</small>	伴 <small>フヤ</small> ニ	容 <small>ニ</small>	各	山	杯	泓 <small>わう</small>	可 <small>シ</small> レ	似 <small>ニ</small>
為 <small>タラシム</small> ニ	老	垂	求 <small>ド</small> ニ	頽 <small>くづレテ</small>	置 <small>ク</small> ニ	容 <small>いッルコト</small> 一	貯 <small>フ</small> ニ	人
三	夫 <small>ヲ</small> 一	白 <small>ノ</small>	其	已 <small>ニ</small>	其 <small>ノ</small>	斗	吾 <small>ガ</small>	間 <small>ニ</small>
友 <small>ニ</small>	否 <small>ヤ</small>	叟 <small>そう</small> ニ	偶 <small>ニ</small>	久 <small>シ</small>	右 <small>ニ</small>	酒 <small>ヲ</small> 一	有 <small>ル</small> ニ	有 <small>ル</small> ニ

『白氏文集』による

- 〔注〕 ○蒼然——古びたさま。 ○結——凝結する。 ○胚渾——渾沌こんとん。天地開闢ひやくの根源。
- 洞庭——蘇州の西にある太湖に浮かぶ島。洞窟があり、湖南省の洞庭湖と地下で通じていると伝えられる。
- 担舁——力を合わせてかつぐ。 ○郡内——公舎。 ○蛟——みづち。竜の一種。
- 峭絶——切りたつたさま。 ○坳泓——くぼみが深いさま。 ○窪樽——大きな石のくぼみを利用した酒樽さかだる。
- 玉山頽——酒に酔いつぶれても風格を保つさま。 ○少年場——若者の集まるところ。また、その集まり。

設問

- (一) 傍線部 b・d・e を平易な現代語に訳せ。
- (二) 「俗用無_レ所_レ堪 時人嫌_レ取_レ」(傍線部 a)とはどういうことか、簡潔に説明せよ。
- (三) 「不_レ似_二人間有_一」(傍線部 c)とはどういうことか、わかりやすく説明せよ。
- (四) 「能伴_二老夫_一否」(傍線部 f)について、「老夫」の指すところを明らかにして、平易な現代語に訳せ。

第四問

次の文章は、夫の転勤に伴って転居してきた「わたし」と九歳の娘を描いた小説の一部である。これを読んで、後の設問に答えよ。

越してくる前に住んでいた街には、わたしの生家があり、母娘共に通った思い入れのある幼稚園があり、また、ここにはない住民の流動性とそれゆえの気軽さがあつた（わたしの母などは、それをいいことに家族を放つて奔放に生きたものだった）。離れることに抵抗がなかつたわけではない。それでもわたしは度重なる話し合いの末、この家移りに了承したのだ、経済的事情と家族を切り離さないという大義を以て。

一方で、娘の翔子は悩む権利さえ与えられず、馴染み切つた環境から強制的にべりべりと剥がされて異空間に放り込まれ、いまは同じ年の子たちの好奇の目に晒されている。ひとりっ子特有の諦めの早さで抵抗は放棄し、流されるままにここへ辿り着いた彼女だったが、そのころには、海にたゆたう流木のようなやる瀬なさをまとうようになっていた。

「なにあれ」

前を歩いていた翔子が呟く。わたしたちはいつのまにか住宅街を外れて、右手に立派な牛舎が見えるところまできていた。舗装された一本道の脇には体育館ほどの牛舎があり、その手前に、外側を黒いラップで巻かれた巨大な塊が塀のように並べられている。

「たぶん、牧草ロールかな。牛の餌だよ」

わたしが答えると、翔子はふうん、とつまらなそうに呟いた。それから牛舎からの臭気が増したとでも言わんばかりに顔を歪めて、道端にあるスギナの頭を何度かつま先でつつく。クリスマスツリーのようにも見えるそれを、彼女はやがて踏み潰した。長靴

があがると、その下から情念のこもった幽霊のように緑がゆらりと立ちあがる。

——そろそろ帰ろうか。

わたしがそう言いかけたとき。翔子の肩越しに、すみれ色のカーディガンがゆれるのが見えたのだった。すぐに右手に握られたオリーブ色のリードと、その先につながれたコーギー犬も目に入る。翔子も気づいたようだった。

アンバーが飼い主を急かしながら駆けてきて、翔子もそちらへ吸い寄せられていく。わたしはその背を追いかけながら、リードを握る彼女に向かって「すみません」と頭を下げた。彼女は左手で髪を耳にかけながら、目礼をする。わたしははつとした、そのあとで左手が耳朶みみたぶに伸び、裏側をやさしく何度か撫なでたから。

亡くなった母が、よくそうしてピアスをゆらしていたものだった。懐かしい記憶——あのひとも生きていれば、彼女ほどの年齢だったろう。

遠くのほうでキジバトが鳴いているのが聞こえた。朝、八時半すぎのこと。車通りもほとんどない道端には、湿気を含んだ生ぬるい風が吹いていて、三人と一匹のあいだを静かに流れていった。夜にはうるさいほどだった蛙かえるの声も、いまは聞こえない。

気づけば、ついさっきまでは能面のようなだった翔子が笑っていた。アンバーの首の周りを両手で挟んで、ふるふるとゆらしている。

「あんちゃん、お尻ふってる」

彼女はそつと、まるで翔子という生き物を怯おびえさせまいとするかのように、小さな声で呟つぶいた。わたしが顔をあげると、その囁ささやくような声のまま、

「うちの畑、見に来る？」と翔子に向かって尋ねる。秘密基地にでも誘うかのようだった。百七十センチあるわたしの視点からは、翔子がこくりとうなずくのがよく見えた。

彼女はそれから、わたしたちの前をアンバーに急かさされるようにしてずんずん進んでいった。牛舎からまっすぐに三分ほど歩いて行くと、左手に畑地が見えてくる。ビニールハウスが整然と並ぶその手前に、広々とした畑がずらっと並んでいた。どの区画も

手入れが行き届いていて、真つすぐに伸びるきれいな畝からは等間隔に苗が顔を出している。ざつと見渡しても雑草などはほとんど目に入らない。ところどころに黒いマルチシートがぴつちりと張られていて、柔らかな日差しを反射させてきらきらと光っていた。

しかし彼女は、その畑地のほうには目もくれない。アンバーにリードを引かれるようにして、迷うことなくビニールハウス群の脇に通っている細い道を、奥へ奥へと進んでいった。まっすぐに延びているその道の、行き止まりには森が見え、右手には青々とした田、左手には高い樹木が並んでいる。途中の十字路で軽トラ一台とはすれ違ったが、それ以外にひと気を感じるものはない。葉がこすれる音と、砂利を踏みしめるざりざりという音だけが耳元で鳴っていた。

しばらく行くと左側の樹木が途切れ、ひらけた場所があらわれる。どうやら、そこが彼女の言う「畑」らしかった。

すぐに言葉が出なかつたのは、本当になんと言つていいかわからなかつたからだだつた。目の前に広がつていたのは、はつきりとした畝もなく、ともすると地面から生えているのが野菜なのか雑草なのかさえわからない、混沌とした土地。見渡せるほどには広いが、三方を高い樹木に囲まれていて、特に奥のほうは耕作放棄地かと思うほどに背の高い草が鬱蒼と生えている。ところどころには果樹がぼつぼつと植わつていて、よく見てみると地に落ちている未熟な実もいくつあつた。

「……ジャングル」

沈黙を破つたのは、娘の翔子だつた。

「いいでしよ」

彼女——弥生さんは、目尻に皺を浮かべ、悪戯つばくほほ笑んだ。色素のうすい胡桃色の目が、日を浴びて光つていた。

それから数日後の授業参観の日にも、わたしと翔子は散歩に出ていた。さぼるのを決めたのはわたしだつた。「お子様の学校での様子を見ていただくために」と明朝体で書かれた案内文や、来ないでいいよと言つたときの翔子の虚ろな目、それを夫に告げたときの曖昧な笑みと「まあ、任せる」、そういったものすべてがばかばかしくなつて、前夜になつて翔子に言つたのだつた。

「明日、弥生さんとアンバーに会いに行ってみる？」

リビングにいて、夫とオセロ盤を挟んでいた翔子は勢いよく顔をあげた。盤面に向き合っていたとき、彼女の上唇は富士のようにふっくらと尖っていたのだが、驚きと喜びでそれはすぐに引き伸ばされた。やがて、そのあいだから白くて小さな歯がのぞき、「明日、雨降らないよね？」とカーテンの閉まった窓を意味もなくふり返る。「確認したから大丈夫」、翔子のための提案ではあったが、そう答えるわたしの声もはずんだものになっていた。

翔子は晴れたその当日、デニム地のオーバーオールを着て、カナリア色の長靴を履いていた。弥生さんに初めて会ったとき以来、散歩といえばその長靴を履くようになっていたのだが、あれから一度もあの畑には行っていない。でも念のために、とわたしたちはポケットに軍手も忍ばせて、斜向かいへと向かった。

弥生さんはすぐに出てきた。わたしたちの提案を聞くと、あらまあ、と柔らかに笑い、さっとわたしたちの足元に目をやって、畑も寄っていいかしら、と訊く。翔子がそれに「軍手、持ってきました」と即答したものだから、わたしの顔はじんわりと熱くなった。

弥生さんはアンバーを連れて外へ出るなり、「それじゃあ」と歩きだした。腕にはベージュのアームカバーをつけていて、腰にはカーキのショートエプロン(このエプロンには、美容師のそれのようにポケットがたくさんついていて、いろいろなものがつまっていた。剪定鋏に麻の紐、飛行機型のペーパークリップ、ハンカチ、はちみつ味の飴。畑でそのときどきに必要なものを、まるで手品のように出しては仕事をするものだから、翔子がこれを知るとひどく羨ましがった。それから数年はオーバーオールのポケットを膨らませて、ときおりチョコの染みをつくることになる)。

畑に着くと弥生さんは、まず果実を採った。ブルーベリーやグミなど、ちいसानものは表面をハンカチでさらっと拭いてその場で食べてしまう。翔子はもらったグミの実を珍しそうに弄んだ。「ざらざらする」と触感に笑い、噛んでみて甘酸っぱさにさらに口角をあげる。

弥生さんは草刈りもざっくりとやった。高い雑草を根元からではなく適当に切って、そのまま放置してしまう。支柱もほとんど

立えず、トマトの芽かきなんかもわざわざしない。

「夫がね、そういうひとだったの。好きなものは先に食べて、辛いことはあんまりやらない。それでも育つから面白くてね。反対に、あんまりこつちへ、こつちへとやりすぎると、なんだかうまくいかなかったりもして」

^エ彼女の言葉に思わず翔子を見てしまう。アンバーと一緒に走り回っている彼女は、小さな笑い声をあげていた。引越す前の家では、この笑い声が親友の女の子のものと重なって、二倍にも三倍にもなって聞こえてきたものだった。つられてこちらの口角もあがってしまうような、ケラケラとした笑い声だった。

(仲谷実織「宿雨のあとで」による)

〔注〕 ○アンバー——斜向かいに住む弥生の飼犬。

○マルチシート——畑の畝を覆うシート。

○芽かき——不要な芽を摘み取ること。

設問

(一) 「クリスマスツリーのようにも見えるそれを、彼女はやがて踏み潰した」(傍線部ア)とあるが、ここからうかがわれる翔子の心情について、説明せよ。

(二) 「彼女——弥生さんは、目尻に皺を浮かべ、悪戯っぽくほほ笑んだ」(傍線部イ)とあるが、ここからは弥生のどのような気持ちが読み取れるか、説明せよ。

(三) 「そう答えるわたしの声もはずんだものになっていた」(傍線部ウ)とあるが、それはなぜか、説明せよ。

(四) 「彼女の言葉に思わず翔子を見てしまう」(傍線部エ)とあるが、それはなぜか、説明せよ。